かしこい娘 オーストリア

昔むか 金持ち \tilde{O} お百姓と貧乏なお百姓が、 となりあって住んで

の牛が、 さんが、夫にいいました。 お金を貸してもらいました。そして、そのお金で、牛を一頭買いました。 あるとき、 ある夕方、 貧乏なお百姓は、 かみなりに打たれて死んでしまいました。 お金が無くなってしまったので、 すると、 となりの金持ち 金持ちのおかみ ところが、そ

「おとなりさんは、 かわりに畑をもらおうじゃないか」 もう牛でかせぐこともできない んだから、 お金は返してもらえない

「なるほど、そのとおりだ」

金持ちはそういって、貧乏なお百姓の所に行きました。

「貸した金は、畑で支払ってもらおう」

でした。すると、お手伝いの娘がいいました。 貧乏なお百姓は、 畑を取られたら食べていけないし、 どうしたらいい か分かりません

伯爵は、 「伯爵に相談なさるといいわ。公正なかただから、きっとうまくおさめてくださるわ」 お百姓は、伯爵の屋敷に出かけて行って、お金を貸してもらえないかとたのみました。

「何にお金がいるのかね」とたずねました。お百姓は、

と答えました。伯爵は、 なりに打たれて死んでしまったんです。お金を返さなければ、畑を取られてしまいます」 「となりから借りたお金で牛を買い、それでかせごうと思ったんですが、 その 牛がかみ

い」といいました。 「この場でお金をやるというわけにはいかない。 そして、金持ちにも、 同じ日に来るように知らせました。 一週間たったらもう一度ここに来なさ

ふたりに、こんななぞを出しました。 一週間後、貧乏なお百姓と金持ちは、 伯爵の屋敷にやって来ました。すると、 伯爵

なものは何か」 「この世でいちばん太っているものは何 か。 11 ちばん美しい もの は何 か。 11 ちば ん豊か

そして、金持ちに、

なかったことにするんだ」とい 「おまえが当てたら、 となりから畑をもらうが いました。 V V) だが、 となりが当てたら、

て行きました。 貧乏なお百姓と金持ちは、 一週間後に答えを持 ってくるという約束をして、 家に帰

金持ちは、家に帰ると、おかみさんにいいました。

なものが何なのか、 「一週間後に、この世でいちばん太っているもの、 か 答えなきやならんのだ。世界は広 いちばん美しいもの、 いのに、そんなことわかるわ 5 ば わけが

すると、おかみさんはいいました。

いちばん美しいのは、わたしだし、 「そんなの、わけないわよ。いちばん太っているのは、うちの小屋にいる雄牛たちだし、 いちばん豊かなのは、伯爵さまの次にはわたしたち

とわかるわけがないじゃないか」 なものが何なのか、 「一週間後に、この世でいちばん太っているもの、いちばん美しいもの、いっぽう、貧乏なお百姓は、家に帰ると、お手伝いの娘にいいました。 答えないと、 畑を取られてしまうんだ。 世界は広いのに、そんなこ いちばん豊か

娘はいいました。

しいのは五月、いちばん豊かなのは神さまの祝福ですよ」 「そんなの、わけないじゃありませんか。いちばん太っているものは大地 ちばん美

をたずねました。お金持ちは、 一週間たって、 ふたりは、 伯爵の屋敷に行きました。伯爵は、 まず、 お金持ちに答え

あたりでいちばん美しい妻を持っています。そして、 「うちの小屋には、この世でいちばん太った雄牛がおります。 いちばん豊かなのは、 それに、 わたしは、 伯爵さまの

つぎに、伯爵は、 貧乏なお百姓にたずねました。 お百姓は答えました。 次にはわたしです」と答えました。

「いちばん太っているものは、大地です」

伯爵は、金持ちに、

「本当かね」とききました。 金持ちは

「はあ、 確かにそうです」と答えました。

つぎに、 貧乏なお百姓は、

「いちばん美しいのは、五月という月です」 とい 1 ました。 伯爵が金持ちに、

「本当かね」ときくと、金持ちは、

「はあ、 確かにそうです」と答えました。

最後に、 お百姓はいいました。

「そして、いちばん豊かなのは、 神さまの祝福です」

「本当かね」

「はあ、確かにそうです」

伯爵は、金持ちにいいました。

「おまえは、三つとも、はあ、確かにそうですといったぞ。 おまえの負けだ。

り立ててはいかん。 さあ、うちへ帰れ」

金持ちが行ってしまうと、伯爵は、貧しいお百姓に

「だれがおまえに知恵をかしてくれたのかね」とききました。

「うちの手伝いの娘です」

くって来ると、伯爵は、このかしこい娘をすその娘を連れてきてくれないか」 Ó かり気に入って、 結婚を申しこみ

ふたりは結婚することになりました。 ました。娘は、自分は貧乏だからと断りましたが、 伯爵がどうしてもあきらめない

ばん好きな物をひとつだけなら持って行ってもいいがな」といいました。 助けてやってはいけない。 「ただし、ひとつだけ条件がある。もしだれか百姓が知恵を貸してくれといってきたら、 そんなことをしたら、 三日目には出て行ってもらおう。

ふたりは、とても楽しく幸せに暮らしはじめました。

るとすぐ、よろよろと近くの大百姓の雄牛の群れに紛れ込みました。 「うちの雄牛が子馬を生んだぞ」とふれまわりました。小百姓は、びっくりして、 何年かたったある日のこと、ある小百姓の雌馬が子馬を生みました。子馬は、 大百姓は

かになり、ふたりは、伯爵の所へ白黒をつけてもらいにやって来ました。伯爵は、 「その子馬はおれのもんだ」といいましたが、大百姓は相手にしません。そこで、 けん

こうして、小馬は大百姓のものだということになりました。 「では、わたしのものでございます。うちの雄牛の所にいたんですから」といいました。 「子馬は、自分の母親がだれなのか分かるだろう」といいました。すると、 大百姓は、

暮らしがどんなものかご存じだ」 た、あの貧乏なお百姓が聞きつけました。そして、小百姓をなぐさめていいいました。 「伯爵夫人の所に行ってみろ。かならずいいことを教えてくれるから。 小百姓がしょげかえっていると、今は伯爵夫人となっている娘が以前手伝いをしてい あの人は、

小百姓が、伯爵夫人に訴えると、伯爵夫人は、

「自分で伯爵に話してごらんなさい」といいました。

「でも、だめだったんです。どうすればいいんでしょう」

とは、決していってはいけませんよ」 釣れない』と伯爵がいったら、こういうんです。『こんなところで魚を釣れる道理がない るんだ』とたずねるでしょう。あなたは、『魚釣りです』と答えなさい。 「では、 んなら、雄牛が子馬を生む道理もありません』ってね。でも、 朝早く、伯爵の部屋の窓の外のもみの木に登るんです。伯爵は わたしが教えたというこ 『木の上で魚は 『なにをしてい

窓辺に行ってパイプに火を付けたとき、小百姓に気付きました。そして、 つぎの朝、 小百姓は、早く起きて、伯爵の窓の外のもみの木に登りました、 伯爵は、

「おまえ、そんなところで何をしているんだ」とたずねました。小百姓は、 教わったと

「魚釣りです」と答えました。

「そんな木の上で魚は釣れんよ」と、伯爵が笑うと、 小百姓はい いました。

「こんなところで魚を釣れる道理がないんなら、 雄牛が子馬を生む道理もあり ません

旧爵は、おどろいて、小百姓に、

「下りて来い」といって、 だれがそんな知恵をつけたのかとたずねました。

「自分で思いつきました。伯爵さま」

そんな知恵があるのなら、 この前だって、 申し開きができたはずだ。 だれに教

わったのか、いわないと、牢屋にぶちこむぞ」

小百姓は、困ってしまって、

「じつは、伯爵さま。おくさまが教えてくださいました」といっ てしまいました。

とが、よく分かったからな」といいました。「分かった。うちに帰れ。子馬を取りもどせるようにしてやる。 おまえの ものであるこ

伯爵は、すぐに、伯爵夫人の所に行っていいました。

「あと三日はうちにいていい。三日たったら、 おまえのい ちばん好きなものをひとつだ

け持って出て行くんだ」

伯爵夫人は、

分は伯爵のグラスを手に取っていいました。 も、ワインをなみなみとつぎました。それから、 スにこっそり眠り薬を入れ、その上にワインをなみなみとつぎました。伯爵のグラスに 楽しく飲みましょう」といいました。そして、 「わたしたち、 出会った日にワインを楽しく飲みましたね。 ワインとグラスを用意して、 自分のグラスを伯爵の前に置いて、自 だから、 れ のワインも、 自分のグラ

が飲み干すことにしましょう」 「これが別れのワイン。わたしのグラスをあなたが飲み干し、 あなたのグラスをわたし

たのみました。 乗りこみました。そして、 伯爵夫人は、召使たちにいいつけて、眠っている伯爵を馬車に乗せ、自分もとなりに 伯爵は、ワインを飲んだとたん、テーブルを前にして眠りこんでしまいました。 貧乏なお百姓の家に行って、 しばらく部屋を貸してほしいと

つぎの朝、 伯爵がベッドで目を覚ますと、 あたりの様子が V つもと違います。

「おい、わしはいったいどこにいるんだ」

伯爵夫人は、

ほかにありますか」と答えました。 ていいとおっしゃったじゃありませんか。 「わたしが前に暮らしていた部屋ですわ。 わたしにとって、 あなたはわたしに、 あなたほど愛するものが、 最愛のものを持 つて行っ

記爵は、いいました。

まいったよ。さあ、いっしょにうちに帰ろう」

『世界の民話28 オ ストリ テ 飯豊道男/ぎょうせい

再話:村上郁